

大学生の自己教育力に関する研究 (4)

—自己教育力と学習目標との関係—

○森 敏昭 石田 潤 清水益治
(広島大学) (神戸商科大学) (大阪樟蔭女子大学)

【目的】 本研究の目的は、大学生の自己教育力と学習目標との関係を明らかにすることである。

近年、学習目標は熟達目標(mastery goal)と成績目標(performance goal)に分類されている。桜井(1995)によれば、熟達目標を持つ人は、①新しい能力や技術を習得することに関心があり、②学習それ自体に価値を置き、成功は努力の産物であると考えている人である。他方、成績目標を持つ人は、①自分の能力を他者が認めてくれることに関心があり、②成功すること、他者に優ること、少ない努力で達成することなどによって能力の高いことを証明しようとする人である。

自己教育力が高い人は、他者との比較よりも自分を伸ばすことに注意を払っているため、成績目標よりも熟達目標と自己教育力は関係があると予想される。

【方法】 調査対象 4年制大学6校と専修学校1校の学生計768名(うち男子242名、女子526名)。

調査項目 ①自己教育力尺度 森ら(2000)の質問紙。この質問紙は、現在、中学3年生頃、小学6年生頃の3つの時代における自己教育力を表1に示す7つの領域について、それぞれ5項目ずつで測定するものである。

②学習目標尺度 桜井(1995)の質問紙。この質問紙は、熟達目標と成績目標の2つの尺度について、それぞれ8項目ずつで測定するものであり、各項目について「全く当てはまらない(1)」から「非常に良く当てはまる(6)」の6段階で評定するようになっている。例えば、熟達目標を測定する項目には「能力よりも努力の方が重要である」「間違いは、成功するための良いヒントを与えてくれる」などが含まれており、成績目標を測定する項目には「成績の善し悪しが大切であって、勉強過程がどうなのかは二の次である」「勉強では、一生懸命やることよりも、良い成績を取ることが大切である」などが含まれている。

手続 平成11年12月に、各学校の教室で、自己教育力測定尺度の現在用、中学用、小学用、学習目標測定尺度、およびその他の質問紙を閉じた冊子を配布して、記入を求めた。

【結果と考察】 学習目標測定尺度の各評定を得点として熟達目標得点と成績目標得点を算出した(8~48点に分布)。各得点が高い者から約±(範囲[人数]:熟達目標は37~48[251]、成績目標は29~48[233])と低い者から約±(範囲[人数]:同じ順に8~31[253]と8~22[261])を選び出し、各領域の自

己教育力得点の平均を時代ごとに算出した(表1)。

領域ごとに2(熟達目標)×3(時代)の分散分析を行ったところ、全ての領域で熟達目標の主効果が有意であり、高群が低群よりも自己教育力得点が高かった。時代の主効果も全ての領域で有意であり、下位検定の結果は先の研究(石田ら,2000)とほぼ同じ結果であった。課題意識・主体的思考・計画性では交互作用も有意であった。課題意識では低群において現在と小学時代の差が有意ではなかった。主体的思考では低群において中学時代と小学時代の差が有意ではなかった。計画性では小学時代において高群と低群の差が有意ではなかった。成績目標に関して同様の分析を行ったところ、全ての領域において時代の主効果のみが有意であり、下位検定の結果は先の研究や熟達目標の分析とほぼ同じであった。

熟達目標でのみ高群と低群の自己教育力の間に差があったことは予想と一致している。熟達目標が低い者は小学時代から中学時代にかけて主体的思考がのびず、大学生になって課題意識が低下すること、高い者は小学時代から中学時代にかけて計画性が大きくのびることがうかがえる。

熟達目標と成績目標の相関は-.07であった。そこで、得点の高低を組み合わせて、熟達目標・成績目標の高・高群(76名)、高・低群(88名)、低・高群(82名)、低・低群(79名)を設定し、現在の自己教育力得点の平均値を比較した(表2)。領域ごとに2(熟達目標)×2(成績目標)の分散分析を行ったところ、全ての領域で熟達目標の主効果が有意であり、高群の方が低群よりも自己教育力が高かった。主体的思考では成績目標の主効果も有意であり、低群の方が高群よりも主体的思考の得点が高かった。自己評価では交互作用が有意であり、成績目標が低い群においてのみ熟達目標による差が有意であった。

主体的思考について、成績目標が高い者は、他者に認められない場面では主体的に動かないのかもしれない。自己評価について、高・高群は自己評価があまり高くない。学習目標が高すぎて、自己評価が低くなったと考えられる。そのため成績目標が低い群においてのみ熟達目標による差が顕著に現れたのであろう。

【文献】 森ら,2000 大学生の自己教育力に関する研究(1) 日本教育心理学会第42回総会

桜井,1995 「無気力」の教育社会心理学 風間書房

表1. 領域別・時代別自己教育力得点の平均(現在-中学時代-小学時代)

目標	群	課題意識	主体的思考	学習の仕方	自己評価	計画性	自主性	自己実現
熟達	高	3.1-3.5-2.4	3.3-2.7-2.5	3.5-3.6-2.6	3.4-3.9-2.5	3.0-2.7-1.6	2.8-2.6-3.0	4.3-3.8-3.1
	低	1.6-2.5-1.7	2.4-2.0-1.9	2.6-3.2-2.2	2.8-3.4-1.7	2.4-2.1-1.4	2.1-1.9-2.2	3.4-3.1-2.5
	平均	2.4-3.0-2.1	2.8-2.4-2.2	3.2-3.4-2.4	3.1-3.7-2.1	2.7-2.4-1.5	2.4-2.3-2.6	3.8-3.5-2.8
成績	高	2.2-2.9-2.1	2.9-2.4-2.3	3.2-3.4-2.5	3.1-3.7-2.2	2.7-2.5-1.5	2.3-2.3-2.8	3.8-3.5-2.9
	低	2.4-3.0-2.1	2.9-2.4-2.1	3.2-3.5-2.4	3.1-3.7-2.1	2.8-2.4-1.6	2.5-2.3-2.7	3.9-3.5-2.9
	平均	2.3-3.0-2.1	2.9-2.4-2.2	3.2-3.4-2.5	3.1-3.7-2.2	2.7-2.4-1.6	2.4-2.3-2.7	3.9-3.5-2.9

表2 現在の自己教育力得点の平均(標準偏差)

熟達・成績	課題意識	主体的思考	学習の仕方	自己評価	計画性	自主性	自己実現
高・高	3.2(1.3)	3.3(1.3)	3.6(1.1)	3.3(1.1)	3.0(1.4)	2.7(1.3)	4.3(0.9)
高・低	3.2(1.2)	3.4(1.2)	3.7(1.1)	3.7(1.1)	3.1(1.6)	2.9(1.1)	4.4(0.9)
低・高	1.5(1.2)	2.3(1.5)	3.0(1.2)	3.0(1.2)	2.3(1.6)	2.0(1.4)	3.4(1.5)
低・低	1.7(1.2)	2.7(1.4)	2.8(1.2)	2.6(1.2)	2.5(1.6)	2.2(1.4)	3.4(1.5)

一連の研究は文部省科学研究費(基盤研究(B)-(1),課題番号:11410032) 研究代表者 森敏昭 に基づくものである。